ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

猿橋中の生徒 学習記録残す

<3>

郷土歴史クラブ

調査研究や清掃

名勝・猿橋の荒廃化に心を痛め、早急な架け替えを訴えた人がほかにもいた。地元猿橋中の生徒たちだ。

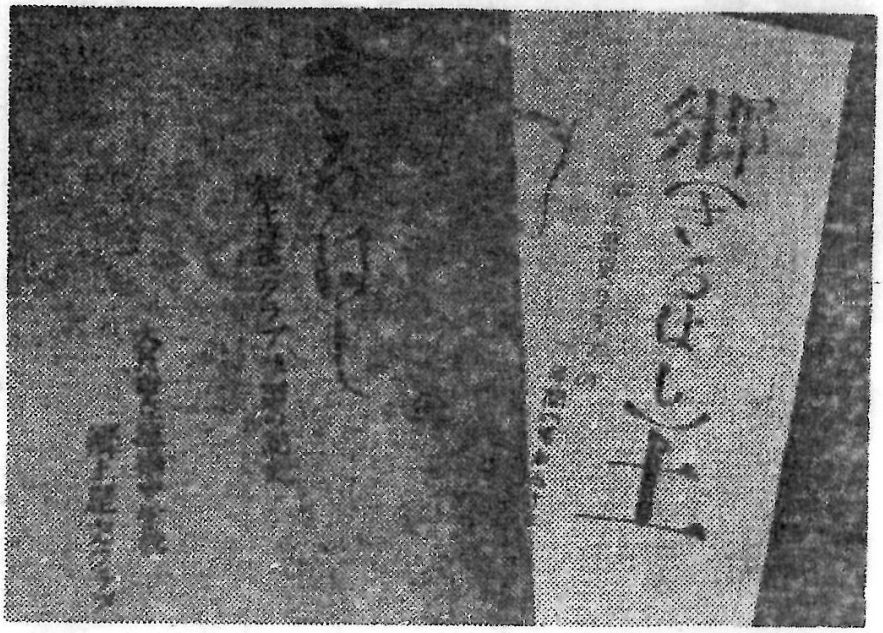
学校は昔の北都留郡役所跡に建つ。校歌の石碑を降りると、そこが猿橋。校歌にも〈古きゆかりの　かけ橋の　下にたたえし　桂川……〉とうたわれている。切っても切れない関係にありながら、実はあまりに身近過ぎて猿橋に目を向けることが少なかった。

それが五十二年、県の「社会参加学校クラブ活動事業」の指定校になり、学校内に郷土歴史クラブが誕生したのがきっかけで、生徒たちの見る目は変わった。

地元の史跡、文化財調査に乗り出した四十人のクラブ員らの目に映ったのは、すでに通行禁止のロープが張られ、ボロボロの橋板をきらす猿橋だった。

さっそく、橋の由来やら構造、規模などの調査研究を進めるかたわら、毎週一回、登校時に橋のたもとの清掃奉仕を始めた。落ち葉がたまっては橋の腐食を早める。だから橋の上こそ掃除したいが、入れない。そんなもどかしさも手伝って、ある日、一人の男子生徒がそっとロープをくぐり、橋板を踏みはずし、あわやという事故が起きた。クラブ員らはお目玉を食らったが、はからずも猿橋の傷みが予想以上に進んでいることがわかり、市教委などに衝撃を投げた。

やがてクラブ員たちは「清掃奉仕だけでは事態が解決しないことに気づいた。「文化財を守ろう」とのポスターを街の各所に張り出すとともに、学習記録「さるはし」（五十三年三月）をまとめ、各方面に配布した。



一人の女子生徒がその中で書いている。「もし橋が落ちたら、私たちの学校はどうして『猿橋』なのか、次の世代の人たちにはわからなくなってしまう。名ばかりではありません。日本三奇橋の一つを失い、郷土の人たちが残してくれた、お金で買えないものも失います」

生徒たちの叫びは市教委を動かし、やがて県、文化庁を動かし、翌五十四年に架け替えが決まった。

当時のメンバーは学校を去ったが、橋の清掃は生徒会に引き継がれ、いまも続く。その活動を見守りながら、この三月で退官した前校長の知見勝雄さんは、つい先日の最後の卒業式でこんなはなむけの言葉を贈った。

「君たちはゆかりのある古い土地に生まれた。どこに行っても郷土を忘れないで……」と。

猿橋中の郷土歴史クラブがまとめた学習記録「さるはし」